

ディープエシカルのすすめ

次世代につなぐ、地球の環境と社会の共生を目指した、古くて新しい文化創造「エシカル」。その概念や時代認識・未来創造について学び、一人ひとりが実践する持続可能な「エシカル」社会について考えます。

「エシカル (ethical)」は、英語で「倫理的な」「道徳的な」を意味するが、近年、深刻な環境破壊と社会問題に直面するなかで、地球の環境と社会に配慮して行動する姿勢や価値観を「エシカル」という。その「エシカル」について、一般社団法人日本エシカル推進協議会会長の山本良一氏にうかがった。

「point of no return」

「2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会に向かい、サステナブルな運営・資材調達を目指した認証などの動きがあるなか、これを機に、一人ひとりのエシカル意識の高まりも期待できるでしょうか。」

山本良一氏 わたしは工学部の人

間です。産業界は相当な努力をして、環境や社会への配慮を行い、国際標準を大事にしてきたことを理解しています。ところが今、オリンピックを目の前にして、一番議論になっているのが日本の農林水産業で、国際標準からは程遠いのではないかとわれています。振り返れば、日本は1980年代、ISO 9000という品質管理の国際標準ができたときに、品質管理には自信があるからと無視して、大失敗をした経験がありました。

—大失敗というのは？

山本 国際貿易で日本の製品を売るうとしても、認証をとっていないことで相手にされなかったのです。日本は世界で一番遅れていた訳です。

サバイバルをかけた エシカルとは

一般社団法人 日本エシカル推進協議会 会長 山本良一氏

その反省があり、1996年にSDG14000の環境マネジメントシステムに関する国際規格ができるや、日本企業は争って取得しました。ところがISO26000の社会的責任に関する国際規格ができる、これには第三者認証が必要なく、自由にやりましようということで、日本は完全にトーンダウンしてしまいました。エシカルには、逆風が吹いているのです。

―そのなかで日本エシカル推進協議会を発足(※1)なさった意図は？

山本 まず考えなくてはならないのは、わたしたちが、どういう時代を生きているかということです。世界は、核兵器で武装してにらみあっている状況にあり、社会を見れば、8人の大富豪の所得が、貧しい36億人の所得と同じという想像を絶する貧富の格差があります。また南スーダンでは飢餓が発生しています。そんな状況にあって、大量の資源エネルギーの消費と環境の破壊を続け、地球は温暖化地獄に突入しはじめています。

―かなり深刻だということですが。

山本 メルボルン大学の研究者 Andrew King が、最近のコンピュータシミュレーションの結果を集め、世界の平均気温が、産業革命以降の気温上昇1.5度Cを突破するのが2024年、2度C突破は2036年と予想しています。

―パリ協定(2015年)による、「産業革命後の気温上昇を2度C以内、できれば1.5度Cに抑える」という目標値を超えるということですね。

山本 現実には、2016年度の世界の平均気温は、産業革命前に比べて1度C上がり、2014年から15年、16年と三年連続で過去最高を記録。2016年だけで見ると、1年で1度C上がりました。つまり、単純計算すると、1.5度C突破は4年後の2020年となり、SDGの予測は2024年ですから、シミュレーションの予測は、概ね正しく思えますね。

それだけでも深刻なのに、

2010年頃に、西南極大陸のアムンゼン海に面する一部氷床がどんどん崩壊し、止めようがない段階に達して、「point of no return」帰還不可能地点」に達したと判定されました。これは航空用語で、燃料の限界で、飛んでから元の飛行場へ戻ってこられる地点を過ぎたことを意味します。このままいくと、グリーンランドの氷床は、2040年頃には臨界点を超えると科学者は予想しています。また北極海では、30年間で9月の海水面積が約半分減り、20年か30年で、北極海の海水が夏には消滅すると予測されています。

―聞いているだけで怖くなるお話ですが、科学者には「point of no return」になるとわかっていて、その原因を作っているのは人間であり産業界である訳です。その間の連携はないのでしょうか？

山本 こういった科学的なことが、経営者の判断、個人のライフスタイルでの商品やサービスの選択に、全く反映されていないのです。気候科学は、このままいくと、最悪の事態

※1 2014年5月に任意団体として発足、2017年4月一般社団法人設立。



が待っていると予言しています。

―最悪の事態とは？

山本 例えば、西南極大陸氷床の「point of no return」に続き、グリーンランドの氷床が「point of no return」を超えると、今世紀中に数メートル海面の水位が上がり、22世紀では5、6メートルを超えて上がってきます。

また2013年に、500名程度の生物学者が署名したレポートが公表されました。それによると、地球生態系全体が「ティッピングポイント」(※2)に差しかかっている、このまま放置すると生物種の大量絶滅が起き、あと2、30年で、わたしたちの子どもや孫は、今、我々が享受している生態系の豊かさを享受できなくなるといわれています。

―子どもや孫ですか、そんなに喫緊の状況なのですね。今こそ、エシカルが重要です。でも、エシカルというトレンド的に軽く捉えられがちです。

山本 浅い意味におけるエシカルでは、世界を根本的に変えられない。

生存のために、環境的にも社会的にも、本気で共生しなくてはいけないところまで来ているのです。サバイバルをかけて、ディープエシカルで考えることが必要だとお伝えしたいと思います。

広がるエシカルの領域

―倫理という地域や文化、時代でも変化するのではと思いますが、エシカルの定義はあるのでしょうか？

山本 いろんな要素があり、エシカルを普遍的に定義したりガイドラインを作るのは、非常に難しいのです。廃棄物学会に頼まれて、「エシカル概論」を書いていますが、やってみると大変だということがわかりました。環境の配慮には、どのような倫理原則があるのか。ほかにも生命倫理や企業倫理などがありますが、これらは伝統的で議論が進んでいる倫理だといえます。ところが、いま新しいエシカルができています。

―新しいということ？

山本 人工知能の倫理やロボットの倫理。身体をコンピュータでつないだり、機械と一体化しようとする研究による「サイボーグ倫理」。さらに、温暖化が深刻になり気候を改変しようとする「ジオエンジニアリング(気候工学)」の研究開発が進むと、「ジオエンジニアリング倫理」もでてきます。

―科学技術の発展による新しい倫理ですね。気候まで改変できるのですか、すごいですね。

山本 去年、アラブ首長国連邦が、雨を降らせるためにドバイの郊外に人工的な山を造る費用の計算をしていることが話題になりました。今年になって、米国ハーバード大学のDavid Keithという教授が、気球を上げて、成層圏に炭酸カルシウムの微粒子を注入する実験をはじめると報じられました。

―影響はないのでしょうか。すごいというより、どこまで人間が操作したいのかと空恐ろしいような…。

※2 それまで小さく変化していたある物事が、突然急激に変化する時点。

山本 気候改変は、今までタブーだったので副作用については、よくわかっていません。しかし、温暖化が進んで大変な状況になってきたので、それも止むなしという認識が広がっています。そこで、ジオエンジニアリングの倫理が問われます。どの程度の小規模実験をやるのが大変難しい問題で、だれに気候を改変する権利があるのか、ほかの動物や植物にとつてどうなのか。こうした新しい倫理的領域が、どんどん広がっています。

—そんな領域の広がりに対して、どのようなことが必要でしょうか？

山本 なるべく早く、みんなで議論すること。多様な考えがあるので、考えを集約して実行しないと、今の危機を突破できません。

—日本では、そういった議論があまり聞かれませんが。

山本 日本では、専門家や役所、政治家や企業の代表者など、知識や力のある人間が中心に集まって議論し、

それを市民に教えるという、いわば家父長主義が主流ですが、それでは通用しない時代になっています。みんなが声にだして、不安や考えをぶつけ合わなければ、あらゆる問題について、いい考えは出てきません。

—そういった状況を、経営者の方々はどうか感じているのでしょうか？

山本 ここ10年、ずいぶん講演などをさせていただきました。一人ひとりでは、大変高い見識をお持ちの方がたくさんいらっしゃいます。しかしビジネスとなると、単独行動ではリスクが高く、そこをどう突破するかという課題があります。そこで、市民がエシカル意識を高めて、何とんでもやらなくてはならないという社会の気運を高めれば、企業の中で先陣を切るころがでてくる。それを、みんなで応援するようにすれば、WIN-WINになるのでは、と思っています。

—個人一人ひとりの意識を高めることですね。ホリスティックに環境と社会を捉え、考えを深める、その具

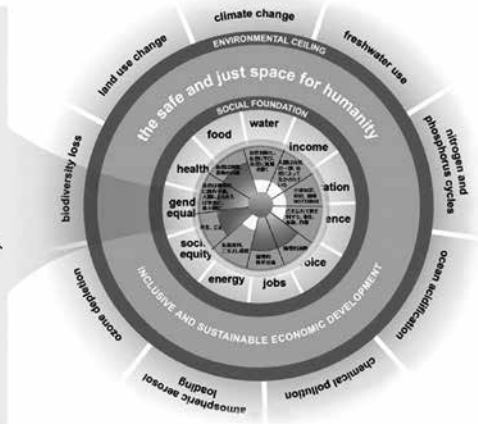
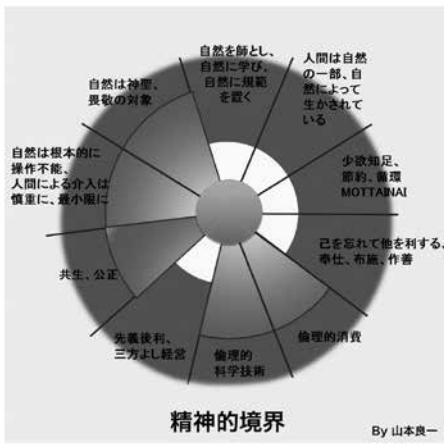
現行動としてのエシカル消費を実行していくことが必要ですね。

山本 市民全体の倫理的な意識が上れば、倫理的なマネージメントや経営にならざるを得なくなり、作られる商品は、当然倫理的な商品になります。人工知能も、倫理的意識の高い国では、倫理性の高いAIやロボットがでてくる割合が高くなると思います。

—エシカル推進協議会では、具体的にどんなことをなさるのですか？

山本 すべてについて、普遍的な倫理原則を打ち立てるのは至難の業ですから、個別に議論を深めて、ガイドラインを作っていくかと思っています。まずはエシカルの基準の策定です。具体的にどういう条件を果たしていればエシカルと言えるのか、実践的・実務的なエシカル基準を策定するために議論します。

普及する場としては、エシカルセミナーやエシカルな教育。エシカルアンバサダーの育成と認定。わたしがやってきているエシカル朝食会



The Doughnut of social and planetary boundaries
by Kate Raworth

で、いろんな分野の方と交流してきます。

その他、エコプロダクツ展示会でエシカルワールドを開催したり、エシカルファッション・カレッジを開いたり、エシカルアワードでは取組みについて表彰する。マルチステークホルダーで「エシカルトレード(倫理的な貿易)」を推進していく。こういうものを通して、ディープエシカルを広めたいと思っています。

エシカルにおける三つの原則

— エシカルの意味は深く、領域も広がっていますが、サステナブルとの関係はどうなのでしょう？

山本 いろんな誤解があるので、エゴは環境に配慮すること。エシカルは社会的に配慮すること。エゴとエシカルを合わせると、サステナブルになり持続可能に配慮していると考えられますが、わたしは、そうではないと思います。

エシカルという言葉にはもっと広い意味があり、環境に配慮するのも社会に配慮するのも、生命倫理やサ

イボーグ倫理、気候変化に関する倫理なども全部倫理。ですからエシカルのなかに、サステナブルも入ってくると思っています。

— エシカルの方が包括的なのですね。

山本 わたしは、20年以上サステナブルについて考えてきましたが、どれほどの持続可能性を要求するかというときに、人類文明を1000年持続可能にすることがサステナブルなのか、1000年なのか、あるいは1万年か10万年か、現実には意思統一ができていません。

この20年以上の活動で、わたしは、先進国における1人あたりの資源の消費量を、少なくとも半分以下に減らすこと。CO₂の排出量は10分の1くらいにすること。先進国では、脱物質化、ゼロカーボン化、ゼロ廃棄物化を実現する必要があると提言してきました。ところがそれに反対し、いまだに電気の使用量をあげようとする人さえいます。ですから、サステナブルという言葉は国際的に通用していませんが、現実には難しい。今、やらなくてはいけないことは、

地球的境界(地球システムのエゴロジカルな持続可能性のための条件)と社会的境界(社会的な持続可能性を維持する条件)の両方を満たす世界を創りだすこと。それが持続可能な開発目標(SDGs)でありパリ協定なのです。

— エシカルの普遍的な倫理原則をたてるのは難しいとおっしゃいましたが、指針になるものはありますか？

山本 根本的に立脚すべき価値観は三つあります。

まず、自然の内在的価値。現在の自然科学では、レアーアース仮説とありますが、わたしたちの宇宙は、幸運なほど生命の誕生と進化に有利で、特に太陽系の地球という惑星は奇跡的であり、その素晴らしさがわかっていきます。次に人間の尊厳。知的生命体、膨大な種類の生物種がいるなかで、ホモサピエンスだけがこれだけの文明を築きあげたという素晴らしさ。三つ目が、言語や文字を開発し文化・歴史を通して蓄積された真・善・美という価値観を有する倫理的共同体。これら三つの原則が

やまもと・りょういち

1969年東京大学工学部冶金学科卒業

1974年同大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。マックスプランク金属研究所客員研究員

1980年同助教(工学部金属材料学科)、89年同先端科学技術研究センター教授

1992年同生産技術研究所教授、国際産学共同研究センター長

2010年東京大学名誉教授

2011年4月東京都市大学環境学部特任教授(～2016年3月末)、国際基督教大学客員教授

2013年国際グリーン購入ネットワーク名誉会長。その他、環境配慮契約法委員会座長、LCA日本フォーラム会長、エコプロダクツ展実行委員長、日本エシカル推進協議会会長、消費者庁「倫理的消費」調査研究会座長、中国の北京大学、精華大学など31大学の客員教授を歴任、現在に至る。

あるのではないかと考えています。

—自然の価値、人間の尊厳は普遍的だと思えますが、倫理的共同体の価値は、時代の変化によって変わることもあるのではないのでしょうか？

山本 倫理的共同体の価値は時間的に進化していきますが、今では、科学技術が発展しすぎて暴走し、わたしたち自身も翻弄されているといえるでしょう。そのなかで、築きあげてきた倫理的共同体を急激に変えるのは好ましくないと考えています。

—人間の倫理的な思考が、科学技術に追いつけていないのですね。

山本 たとえば延命技術や遺伝子改変技術や、生殖医療。飼っていたペットが死ぬと、その細胞からクローンのペットを創るサービスがはじまっていると聞きましたが、それを人間に応用することだって可能です。野放しにすると、やるうと思えば人道に悖ることまでできてしまうので、良識の真・善・美の倫理的共同体として、重大なインパクトを与

えるような行為は、止めさせなくてはいけない訳です。

—価値観は人によって違いますが。

山本 そのために日常的に議論して、倫理的共同体のレベルをあげていくことが重要です。これからはソーシャルロボットとして、同情したり優しい言葉をかける介護ロボット等もでてきます。日本の人工知能学会は、人工知能の倫理指針を出しましたが、どういう倫理を持たせるかは大変な問題です。

—ディープエシカルは、実に深いですね。

山本 「Doughnut Economics」を提唱するKate Raworthは、外側が地球的境界で、内側に社会的境界を示し、両方を満たすドーナツ型の空間で活動しなくてはいけないといっています。持続可能な開発目標の17項目も、このなかに直接的間接的に関わっています。わたしは、ここにさらにひとつ、精神的境界「スピリチュアル・バウンダリー」があ

ると考えます。

ドーナツは西洋の考え方で、自然や社会を外側から客体としてみています。東洋には、「色心不二(しきしんふに)※3」といって、身体と心は一体だという考え方があり、外に現れているものは心の在り方の問題だと考えます。ですから、ドーナツのまんなかに「スピリチュアル・バウンダリー」が必要だと思うのです。

—精神的境界が倫理的共同体の部分と考えると、エシカルの三つの原則が揃いますね。中心に心があって、そのまわりに社会ができ、それを自然が囲むというのは、日本人としてずっと入ってくる構図です。地球の差し迫った状況をお聞きして、当協会も、一人ひとりの市民が主体的に、地球的レベルで環境と社会に対する責任を自覚し、ディープエシカルな行動を起こせるよう、一層尽力しなくてはいけないと思います。今日はありがとうございました。

インタビュー…

公益社団法人日本フイランソロジー協会

理事長 高橋陽子

②017年4月12日山本エコプロダクツ研究所にて

※3 色法(物質・肉体面のはたらき)と心法(心のはたらき)が、一見、二つの別のものであるようで、実は分かちがたく関連しているという仏教の法理。